

「E. Sapir意味論三部作」への序説 (J. Lyons
2008) : E. Sapir全集からの抄訳

著者	高橋 玄一郎
雑誌名	VERBA
巻	43
ページ	57-66
発行年	2020-03-16
URL	http://hdl.handle.net/10232/00031630

「E. Sapir 意味論三部作」への序説 (J. Lyons 2008)

—E. Sapir 全集からの抄訳—*

高橋 玄一郎

0. 本稿は、アメリカの言語学者・人類学者エドワード・サピアⁱ (Edward Sapir, 1884-1939) による全集の第一巻 (一般言語学), *The Collected Works of Edward Sapir I: General Linguistics* (Mouton de Gruyter, 2008) 所収の, 'Introduction to Sapir's texts "Totality", "Grading", and "The Expression of the Ending-Point Relation"', by Sir John Lyons' (pp. 294-299) の翻訳である。

翻訳の対象となる, この序説は, いわゆるサピアの意味論三部作という, 言語学の意味論に関係する三篇の論考が, サピア全集に収められるにあたり, 現代の言語学者の一人, John Lyonsⁱⁱ が, それに付したものである。E. サピアによる三篇の論考とは, 次のようなものである。

- ・“Totality” (1931)
- ・“The Expression of the Ending-Point Relation in English, French, and German” (1932)
- ・“Grading: A Study in Semantics” (1944)

なお, この序説とは別に, サピア全集第一巻の編者, Pierre Swiggers による, 序言があるが (“Introductory note: Sapir's Studies in Universal Conceptual Grammar”), それは, 今回の翻訳には含まれていない。しかし, その序言タイトルにもあるように, サピアの意味論三部作は, 普遍概念文法 [universal conceptual grammar] に係る研究と位置付けられている。翻訳対象となる序説の中でも, 部分的に言及されているが, サピアの「意味論三部作」は, 実は, 一部, 共著を含むのであるが, 当時の国際補助語への社会的関心を背景として, 当時の国際補助語協会 (IALA) が, 国際補助語の検討に向けた基礎研究, しいては, 人類の言語一般に共通する, 言語構造の枠組みや機能に関する一般言語学研究 (とりわけ意味論) の一環を成すものであった。国際補助語協会の後援を受けて執筆された, *Foundations of Language, Logical and Psychological, an Approach to the International Language Problem* (by William E. Collinson, Alice V. Morris, and Edward Sapir, ed. by Alice V. Morris) と題する, 未完の書によると, 当初, 壮大な研究計画が立てられていたことがうかがわれる。その構成のあらまはは, ここでは割愛するが, “Totality” (1930) の冒頭にある prefatory note に記されており, 意味論三部作のテーマが全体構想の, どのあたりに位置するのかがつかめる。このようなサピアの取り組みは, 20 世紀前半の言語学上, サピアの独自性の一端とも考えられるⁱⁱⁱ。

翻訳対象となる, J. Lyons による序説は, 英語による 16 のパラグラフと 6 つの注から成る。便宜上, 原文のパラグラフに番号を付す。なお, 原注は脚注とし, 訳注は訳文全体の最後に付す。さらに, 原作の文中内の補筆的な注は, 丸括弧 () に, 訳出上の参考として適宜付した原文の語 (句) は, 角括弧

[] に、さらに、訳者による補足は、【 】に入れて示す。

1. サピアは、一般に、意味論学者とは、考えられていない。意味論との関連では、語 (word) の心理的実在性を主張したこと、もしくは、後になって、「サピア－ウォーフの仮説」^{iv}と呼ばれるようになったものを支持したことで、言及されることが多い。語の心理的実在性は、【文字をもつ言語は、もちろんのこと、】Nootka 語¹ のような、文字をもたない言語にも当てはまる^v。また、「サピア－ウォーフの仮説」への支持は、【サピアによる】複数の論考に見られるが、特に、“The Status of Linguistics as a Science” (1929) の中でのもものが、広く知られている。

2. 語 [word] というものは、(識字や書記上の慣習から生じたものだ、とする主張が、言語学者の中に、みられるが、) そのような産物では、決してない【そうではなく、語は心理的に実在するのだ】という、サピアの、厳然たる主張は、この【慣習か、心理的なものか、という】論争に、疑いなく、重要かつ、決定的な役割を果たしたとあってよいであろう。しかし、その主張は、20 世紀の言語学上の意味論の発展に対し、意義ある影響を、いささかも、与えたとは言えない — つまり、形態素や文ではなく、語というものが、意味や文法上の分析の、第一次的な単位ではあるが、【他方、】その考え方に同調しない者には、【同調しないなりに】それを弁護する理由があるのだ、といった程度のことを、伝統的な言語学者たちが、一般的に、考えていたにすぎないのである。いわゆる、サピア－ウォーフの仮説については、確かに、これまで、歴史的に重要な検討事項であった—しかし、1960 年代になると、はやらなくなり (【はやり、という】表現が適切であれば、の話であるが)、今では、【この仮説が】再検討されているのである²。サピアの見解は、現在、徹底した言語相対論者のものでも、【徹底した】言語決定論者のものでもない、と一般的に認識されている。

3. サピアには、意味論そのものを扱う著作は、ほとんど、なかった—むしろ、より精確に言えば、彼自身が、意味論であると言及した著作は、ほとんど無かった。彼が、読者に影響を与えた (しかし、意図的に、専門的ではなく、一般読者を対象に執筆された) 著作、*Language* 【(1921)】には、意味論と銘打った章は、皆無である—しかも、私 [John Lyons] の知る限り、本巻 [サピア全集 第一巻] 所収の、明示的に意味論への貢献とされている、これら三つの論考以外には、【サピアによる】他のどの著作の中にも、言語学の個別分野としての意味論、と認められる箇所はない。しかしながら、1920 年代、1930 年代には、意味論ということばは、現代の言語学よりも、より限定的な意味をもっていた点は、留意しておかねばならない—すなわち、それ [意味論という用語] は、通常、我々が現在、語彙意味論 [lexical semantics] と呼ぶものを指していたのである。さらに、当時は、共時的な^{vi} 語彙意味論は、言語

¹ E. Sapir, *Language* (New York, 1921), p.34

² その検討は現在も数を増しているが、とりわけ、次の文献を参照されたい: Penny Lee, *The Whorf Theory Complex: a Critical Reconstruction* (Amsterdam/Philadelphia, 1996), 加えて、John A. Lucy, *Language Diversity and Thought: a Reformulation of the Linguistic Relativity Hypothesis and Grammatical Categories and Cognition: a Case Study of the Linguistic Relativity Hypothesis* (共に、Cambridge, 1992).

学で広く受け入れられた分野としては、まだ、熟したものではなかった。今日の我々が、理解するところの「意味論」という意味では、サピアによる多くの著作や論考は、それらが理論的なものであれ、記述的なものであれ、意味論に関わるものであった一すなわち、文法の諸範疇と文法的な諸構造 (constructions) に係る意味を扱うものであった。実に、それは、彼の著作 *Language* 【(1921)】の第5章【Form in Language: Grammatical Concepts】に相当するのである。

4. ここ【サピア全集 第一巻】に採録された、意味論に係る三つの論考一すなわち、“Totality”, “The Expression of the Ending-Point Relation in English, French and German” (Morris Swadesh との共著), “Grading” 一は、サピアの、意味論に対する一般的な考え方を、参照可能と見込めるものの中で、最も明確に、直接的な形で、我々に示すものである。しかし、それら [三つの論考] は、【執筆された】当時の状況を考慮する必要があるため、ある程度、説明が必要となる。

5. サピアは、理論にこだわる理論家 [theoretician] というよりは、柔軟な理論家 [theorist] であった一すなわち、彼は、言語構造に関する理論を形式化し、それを精確に、明示的に、示そうとはしなかった。おまけに、彼の理論上の原理の大部分は、サピアが、言語について実践的に記述したものや、それについてサピアが、残したコメントから、我々が推測する必要があるのである一そのコメントは、往々にして、暗示に富み、補足・説明的なものである。【また】サピアは、理論にこだわる理論家ではなかった、というだけではなかった。意味論やそれ以外のより広い分野の、柔軟な理論家として、アイザイア・バーリン^{viii} の思想史 [history-of-ideas] にまつわる隠喩を借りれば、サピアは、ハリネズミ [hedgehog], というよりは、キツネ [fox] であった一つまり、キツネは、多くの知識をもっているが、ハリネズミは、一つのことしか知らない、という【アイザイア・バーリンによる】指摘が、思い起される³。サピアは、他の多くの構造主義の学者と異なり、単一の、同じ視点から、様々な現象を観察する原理 [a single synoptic principle] を持つ者ではなかった一対照性 [contrast], 二項対立 [binarism], 有標性 [markedness], 等の重要な見方を、優先させながらも、それら以外のすべての視点を、理論面もしくは、記述面の著作で、粘り強く、体系づけた。意味論一意味の研究一に関する限り、サピアは、自らの経験を土台としながら、言語学だけでなく、哲学や心理学においても、当時、受け入れられていた、還元主義 [reductionism]^{viii} が、様々な形でもたらす、不適切なありさまを見るしか、なかったのである。しかも、彼は、言語の文法構造、もしくは意味構造を扱う際に、おそらく、気質的に、単一の視点で統一された、単純化する見方を採用することに、気が進まなかったのであろう。すでに述べた通り、サピアは、徹底した相対主義者ではなかった一すなわち、彼は、今日の我々が、普遍文法 [universal grammar] と呼ぶようなものに関して、自らの考えを持っていた。しかし、サピアは、異なる言語や文化、ならびにそれらの多様な (サピアの好んで用いる用語の一つを使えば) パターン化 [patterning], に関する知識

³ この論考の執筆時に、私【J.Lyons】は、E.サピアの子息である Philip 氏が、同じ【hedgehog と fox を用いた】類推に言及していたことに気づいていなかった。この点に注意を向けることができ、本巻の編集者である Pierre Swiggers 氏に感謝申し上げる。もちろん、この類推は、E.サピアに関する限り、至極、適切な引用である。

を持ちすぎているために、機が熟す前の段階で、単純化する一般的な陳述というものを、引き受けることができなかった—単純化する一般的な陳述は、しばしば、理論的な発展の前提条件となっている、という点は、容認されるに違いないとしても—。こうしたことを含めた、より広い理由により、言語学史上、サピアは、偉大な学者であり、人にインスピレーションを与える教師として、卓越した直感的洞察を活かせる、申し分のない、言語の記述主義者 [descriptivist] として、しかし、程度の差こそあれ、理論にこだわる理論家というよりは、柔軟な理論家として、あまねく世に認められている。このように一般化して、サピアを捉える方法は、おそらく、大勢を占める言語学に、概して、当てはまるであろう；意味論にも、間違いなく、当てはまるものである。

6. 実際に、本稿の主題となる、三つの論考—“Totality,” “The Expression of the Ending-Point Relation,” ならびに、“Grading”—が、サピア自身により、意味論に貢献するものと見なされている、と言う際に、おそらく私は、その証左なしで、進めることになる。【実は】これらの論考はすべて、サピアが、W. E. Collinson^{ix}と共に、国際補助語協会 (the International Auxiliary Language Association; IALA) に関わったことに、端を発しているのである⁴。

7. (国際補助語に関する運動に対して、大部分の言語学者は、これまで、全く関心を持たないか、明らかに反対であるか、のいずれかであるのだが、) これら 3 つの論考のうちで、言語学者たちから、何らかの関心を、これまで引きつけてきた唯一の論考は、“Grading”である、という点は、おそらく、偶然ではないであろう (Grading は、サピアの死後、1944 年に出版された際、副題に「意味論研究」とあり、少なくとも、この論考の最終版において、そのように書き上げられたが、【その論考の】序文では、IALA が後援した大規模な研究プロジェクトに対して、何ら言及をしていない；“Grading”は、もともと、サピアの考えの中では、おそらく、“Totality”と“Expression of the Ending-Point Relation”, と同様に、その研究プロジェクトを構成する、重要な部分であったであろう)。“Grading”の中で報告されている研究は、この論考が執筆されてから、出版用に提出される、はるか数年も [many years] 前の時点で、同じ IALA の後援によるプロジェクトの、重要な部分として、【すでに】完成されていた、という事実が、この “Grading” に付された、研究経緯に関する短い注記の中で、述べられている。【しかしながら、】この論考の、本文中には、【この事実への言及は】一切見られない。さらに、この同じ注記は、一人称で書かれており、【意味論研究という】副題が、確信させてくれるのと同様に、サピアは、“Grading”を、本質的に、現在の形で、何らかの実践的な応用【すなわち、何らかの国際補助語の分析や検討】とは切り離して、一般的な意味の理論への一貢献と見なしていた、ということ、確信させてくれる。彼の目的は、【その当時、】残念ながら取り組まれていない研究領域の解明を、他の研究者達に、奨励することであった；その研究領域とは、論理的な意味と、心理的な意味が、言語の形式と、一致する点はどこか、一致しない点はどこか (the congruities and non-congruities of logical and psychological meaning with

⁴ 本巻【サピア全集第 I 巻】の § IV【The Problem of an International Auxiliary Language (1925-1933)】の序説【Introduction: The Problem of an International Auxiliary Language, by Pierre Swiggers】も参照されたい。

linguistic form) を扱う領域であったとされている⁵。この論考【Grading】は、「他の論考と比べて、サピアが未完成の状態のままとしていた」⁵ということが、別の文献から、うかがえるが、サピアが、この論考を執筆した目的を、明確に記載していることは、信頼に足るとみて間違いない。とにかく、国際補助語協会が、明確に陳述しているのは、サピアと Collinson が先鞭をつけた、この研究が、「国際補助語といわれるものの、構造を表すための規範」として資するだけでなく、「一般言語学の研究の基盤」としても、役立つことが意図されていた点である。加えて、Collinson が、1937 年に発表した、“Indication” に関するモノグラフは、“Totality” や “Ending-Point Relation” の論考と、同じシリーズとして世に出るが、これは、意味論へ貢献する研究として、諸文献に、広く引用されている。（“Indication” は、Collinson とサピアが用いた用語で、現在では、deixis (ダイクシス; 場面内指示) ^{xi} と呼ばれるものである。）

8. さらに、“Grading” に対してだけでなく、“Totality” と “The Expression of the Ending-Point Relation” の論考に対して、サピアが、意味に係る理論的研究とみていたかどうか、という問題を、確実な根拠なしで推測するのは、生産的ではないであろう。【しかしながら、】これまでを振り返れば、この二つの論考も、確かに、そのように【つまり、意味に係る理論的研究として】読み得るであろう。この点について、“Grading” の中でも、Mandelbaum^{xii} による【E.サピア選集の】編集上の注記にも、明記されていないとしても⁶、三つの論考が、専門用語や概念の扱い方の面から、首尾一貫していることは、誰の目にも明らかであろう。“Grading” の中では、記述的なデータ分析は、【理論の】例証となっているが、理論上の要点記述ほど、主導的ではない【つまり、理論面が、主であり、データ分析が、従である】。他方、他の二つの論考【“Totality” と “The Expression of the Ending-Point Relation”】は、その逆である【つまり、データ分析が主であり、理論面が従である】。

9. 現在の文脈では、三つの論考それぞれの、豊富で、詳細な内容について、申し分なく、公平に取り扱うことはできない。次のように言えば、十分であろう。三つの論考には、すべて、サピアの広く知られた、前述したような、言語記述面での明晰さが示されており、三つの論考に見られる、多くの経験的なデータは、私【J. Lyons】の判断では妥当なものであり、私の知る限り、独創的なものである。意味論、とりわけ、語彙と文法に係る諸領域において、「論理的な意味と心理的な意味が、言語の形式と、どの点で一致し、どの点で一致しないか」という問題の探求に、サピアが、取り組んだわけであるが、それは、現在では、もはや、「残念ながら、等閑視された研究領域」ではない—等閑視されていたのは、1920 年代や 1930 年代初頭の話である。今日、言語学者だけでなく、心理学者や論理学者が、取り組んでいる、概念（と専門用語に）に係る枠組みは、1920 年代や 1930 年代初頭の枠組みとは、大変異なってい

⁵ 次の文献を参照されたい: Zellig Harris, *Language* 27 (1951), p.289 (サピア全集第一巻にも所収)。この文献は、Harris による、*Edward Sapir: Selected Writings in Language, Culture and Personality* (ed. D. G. Mandelbaum; Berkeley, 1949) の書評である。

⁶ *Selected Writings* (前出), pp.5-6.を参照。

る。これら三つの学問分野における、理論化や形式化は、ここ数十年の間に、各段に、進歩しているのである。先に、「ハリネズミ」の隠喩で触れた、意味理論に係る、理論にこだわる【現代の】理論家たち [theoreticians] は、もちろんのこと、先に、「キツネ」の隠喩で触れた、柔軟な理論家たち [theorists] も、60年もしくは70年前とは、かなり違った方法で、自らの考えを表している。従って、現代において、この解説記事の主題である、【サピアの】三つの論考を読む者は、論考の記述が、【現代の著作と較べて、】散漫で精確さを欠く、と感じることのないように、考慮しなければならない。とにかく、そうした配慮をもって読むことには、十分な意義がある。この三つの論考には、当該テーマに係る、柔軟な理論家や、理論にこだわる理論家だけでなく、言語の記述主義者 [descriptivists]^{xiii} や、どちらかといえば、経験的・実証的な立場から、アプローチする者たちが、学ぶべき点が、いまだに、多くあるのである。

10. 解説という手段で、一般的な面から記す必要のある一点目は、サピアの構造主義について、である。サピアは、構造主義者であったが、それは、我々がすぐに思いつく、1950年代にアメリカの主流となった言語学、という比較的、狭い意味ではなく、人類学、等の社会科学や、西欧の言語学で、常に、使われていた、広い意味でのもの、である。サピアは、音韻論や形態論の分野で、構造主義者であったと、広く認識されてきたのと、同じように、意味論における、構造主義者であった。彼は、この件について、どこにも、はっきりとは、述べてはいない。しかし、サピアの、構造へのこだわり（彼自身の言葉を使えば、*patterning* パターン化【という視点】）は、至る所で、明白である。サピアの意味論三部作は、構造主義意味論における研究なのである。

11. しかし、サピアの構造主義意味論は、サピアより古典的なソスニール^{xiv}、もしくはソスニール後の構造主義とは異なり、静止した性質のものでなく、動的な性質をもっている。これは、サピアが共時態 [synchronic] と通時態 [diachronic] の区別を、重視していないことを、言っているのではない—彼は、確かに、その区別を尊重していた—。また、サピアが、個別言語を、准安定的な体系 (metastable system) —そこには、(プラーグ学派^{xv}の標語を使えば、) 共時態の中に通時態が存在する—であると考えていた、と言おうとするものでもない—サピアは、そのように考えても、おかしくはなかったが、そのようには考えなかった—。ここでいう、動的性質 (dynamism) とは、心理面に関するものであって、時間的な流れに関するものではない。

12. すべての構造主義言語学者と同じように、サピアは、個別言語を、関係性の体系—その体系内では、全ての各単位 (音韻上、形態上、語彙上) が、それら単位がもっている価値を、言語の体系内で互いに結び合う、対照や等価における諸関係から、引き出す—そのような体系、と見なしていた。この単位の結びつき (connection) において、サピアは、しばしば、他の構造主義の学者らが行うのと全く同じように、「関係」(relation) という言葉を用いた。しかし、それは、サピアにとって、動的な体系の、静止している諸関係ではなかった—その動的な体系内では、すべて単位が、流動的、というか、単位同士が、互いに緊張関係にあった—。このことは、おそらく、サピアが、【”Grading”という論考の中で、】同

等 (equality) という概念を定義する方法において、もっとも明確に、みてとれるであろう—サピアは、同等という概念を、次のように定義した：「～以上」と「～以下」の間に存在する、多かれ少なかれ、一時的な点、もしくは移行状態、もしくは均衡状態か、あるいはまた、スケール内の到達点【にあること】—そのスケール内では、程度差を付けうる語彙の意味の段階性が、常に増加するか、減少している (“Grading”, p. 105) ^{xvi}。これが、等価とか、同等という場合の、サピアの考え方であると、ひとたび認識されれば、これが、“Grading” だけでなく、他の二つの論考でも、サピアが論じる、諸々の意味関係の考え方でもあると、容易に理解できる。おそらく、これと類似する考え方は、これまでの構造主義のなかの、他の学者の論考にも見出されるであろう。しかし、サピアの論理形式に関する考え方—というものは、これが、実際にサピアの考え方なのであるが、—これは、論理学者や現代の形式意味論の学者たちの考え方とは、極めて異なっている。

1 3. サピアの論理形式の概念が、今、指摘したような点で、標準的な見方と異なる事実があるからといって、それを、現代の、柔軟な理論家 [theorists] や、理論にこだわる理論家 [theoreticians] が、真剣に考察するには値しないとして、簡単に片づけるべきだ、というのではない。“Grading” は、すでに、【言語表現上の】比較構文 [comparative constructions] や【語彙、等の】反義関係 [antonymy] を、現代的な視点で、取り扱う際に、直接的、間接的に、影響を及ぼしている。たとえば、good と bad という段階的な [gradable] 反義語は、その【両語の間に存在する意味の】段階性が、【形式によって、】明示的に、表現されていなくとも、常に、暗示的に、比較の意味を有する、ということが、例外なく、というわけではないが、現在、言語学者に広く受け入れられている；また、この洞察を定式化する様々な方法が、提案されている。しかし、段階的な反義関係や比較構文について、これ以外の、はるかに多い事例を、サピアの研究から学ぶことができる。

1 4. “Totality” や “Ending-Point Relation” で、サピアが扱った複数のテーマについて、サピアから、さらに多くのことを学べるであろう—たとえば、量化 [quantification]^{xvii}、全体—部分の諸関係、質量 (名詞) —可算 (名詞) の区別、場所や方向に関する諸構文、また、(現代の用語で言えば) 限界性 (telicity)^{xviii}、について、であるが—これらは、言語学の意味論のなかで、主要な重要テーマと認識されていて、近年、集中的に研究されている。ここでは、少なくともひとつの点で、アメリカの構造主義意味論に関する限り、サピアは、後世の理論上の発展を期待している、という点に注意しておこう—サピアの言うところの、全体化 [totalization]^{xix} という言語事象を、サピアが、取り扱う時の方法は、しばしば暗示的であり、時に明示的であり、全体をその構成要素の観点からみる [componential] という、やり方である。

1 5. サピアが、データを挙げて行う議論は、常に、微妙で、興味深いものである；また、彼が、我々に注意を喚起してくれる要点は、我々が、それを明らかにする必要がある—現代の枠組みの中で、それ【すなわち、サピアがデータを用いて例示する要点】を【我々が】説明する際に、サピアの時代の言

語学者にとっては、なじみのない専門的な用語による区別を、援用することになるとしても—【たとえば、】文と発話の区別、言語能力と言語運用の区別、意味論と語用論（プラグマティクス）の区別、等である。場合によっては、サピアが、言語自体に帰すると考えるものは、言語の運用（使用）をつかさどる、原理や慣習という観点から論じられるべき、と言えるであろう—たとえば、言語体系の中に、意味論的に符号化されているもの、の観点から、というよりは、前提とされているもの、もしくは、含意されているもの、の観点から、である。さらに、先に、サピアの構造主義について、極めて特徴的であると言及した動的性質 [dynamism] は、言語能力というより、言語運用の問題であって、そのようなものとして、言語学上の意味論の枠組みではなく、語用論もしくは心理言語学の枠組みの中で、論じられるべきだ、とまで言えるかもしれない^{xxi}。しかし、この結論は、拙速に導くべきではない。先に言及した理論上の区別が（—その区別は、現在、大多数の、理論にこだわる理論家 [theoreticians] が、導き出していることではあるが—）しっかりとした根拠に基づくものかどうかは、まだ、決着のついていない問題である。

16. 不本意ではあるが、そろそろ、この短い解説を締めくくらねばならない。サピアに宿る偉大な力は、もちろん、様々な文化に影響を及ぼす、広範囲に亘り、類型論上、異なる諸言語に精通している点にあった。彼は、しばしば、この知識を諸研究に用いたが、アスペクト（相）^{xxii}という文法範疇に関するサピアのプロジェクト研究（これは、“The Expression of the Ending-Point Relation” の論考で用いられる概念上の枠組みと整合するものであったであろう）においても、間違いなく、そうするつもりであったであろうが、そうはならなかった。ここに採録された意味論の3論考では、サピアは、しばしば、多くの言語（“many languages”）という表現を用いて、一般化 [generalization] を証拠立てるが、それらの言語の名称や語族を特定して表すことはしていない。もちろん、“The Expression of the Ending-Point Relation” の論考は、“Grading” や “Totality” と異なり、英語、フランス語、ドイツ語に関して、明示的に比較を行っている；また、その言語間において、興味深い相違点がある。しかし、類型論的な観点からは、サピアが他の幾つかの論考で、学会の注目を見事に引きつけた構造的な違いと比べると、それほど興味深いものとはなっていない。サピア自身が、その一般化を行っているため、人は、それをそのまま【疑うことなく】信用できるのであろう。しかし、その一般化の中には、今や、本巻に採録されている研究が書かれてから、数年のうちに、類型論的な観点から行われた研究を土台として（その研究の多くは、サピアの門下生が行ったものであるが）、確認できるものが確かにあるのだ。特定の諸言語について確認をし、文法理論、意味理論における最近の研究の進展に照らして、サピアが行った一般化を再構築できれば、それは喜ばしいことである^{xxiii}。そのような課題への取り組みは、語彙と文法に係るサピアの意味論三部作が、サピア全集に再録されつつあることで、弾みがつくはずである。

(訳注)

ⁱ E. Sapir の略歴や仕事については、たとえば、長嶋善郎「Sapir, Edward」（佐々木・木原（編著）『英語学人名辞典』研究社、1995、所収、pp.302-303）を参照されたい。

- ⁱⁱ John Lyons は、Manchester 生まれの、イギリスの言語学者 (1932-)。主著に、*Introduction to Theoretical Linguistics* (Cambridge University Press, 1968. 國廣哲彌監訳『理論言語学』大修館, 1973) ; *Semantics 1 & 2* (1977) ; *Language and Linguistics: An Introduction* (Cambridge University Press, 1980. 近藤達夫訳『言語と言語学』(岩波, 1987) ; *Natural Language and Universal Grammar: Essays in Linguistic Theory*, Vol. I (Cambridge University Press, 1991) 等、がある (cf. 佐々木・木原 (編著) 所収, pp. 216-217 より一部, 引用.)
- ⁱⁱⁱ この点について、長嶋善郎「言語学史におけるサピア」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第 24 号 (2010) pp.39-53 を参照されたい。他方、国際補助語の実用論の方面からサピアを考察したものに、たとえば、渡辺良典「サピア、イエスベルセン、国際補助語」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第 27 号 (2013) pp.41-47 がある。
- ^{iv} いわゆるサピア-ウォーフの仮説は、言語相対 (性) 論として知られているものである。現在も、検証や考察が進められている問題であるが、その概要は、たとえば、松木啓子「言語と文化」(中島平三 (編)『言語の事典』朝倉書店, 2005 所収, pp.445-461.) を参照されたい。
- ^v word という概念を規定するのは、必ずしも容易ではない。しかしながら、word (語)が、心理的に実在するという点については、原注 1 に挙げられた文献の当該箇所を含む、次の訳書も参照されたい：安藤貞夫(訳者)『言語』(エドワード・サピア著, 岩波文庫, 1988), pp.60-64. なお、例示されたヌートカ語 (Nootka) は、カナダのヴァンクーヴァー島の南北に見られる、ヌートカ語群のひとつで、その語群には、他に、マコー語 (Makah) とニティナト語 (Nitinat) がある。ヌートカ語は、分布上、カナダのヴァンクーヴァー島の、ニティナト語地域より、北で話される言語。cf. 亀井・河野・千野(編著)『言語学大辞典』第 3 巻 世界言語編 (下-1) , 三省堂, 1996, pp.6-8.
- ^{vi} 言語は時間の経過の中で変化していくが、ある言語が、どのように変化していくかをみるには、少なくとも二つの時点での、当該言語に係る語彙や文法や意味等に関する状態が分からなければならない。共時的 (synchronic) とは、そのような時間の変化を考慮せずに、時間を捨象した、ある時点における当該言語に対する視点の在り方をいう。それに対して、時間の経過による当該言語の変化に注目する視点を通時的 (diachronic) という。これら二つの視点に係る詳細については、たとえば、荒木・安井編『現代英文法辞典』(三省堂, 1992) の synchronic の項を参照されたい。
- ^{vii} アイザイア・バーリン (Isiah Berlin) は、ラトビア生まれで、英国の政治哲学者 (1909-1997)。hedgehog と fox を用いた類推については、本来的には、古代ギリシャの詩人、アルキロコス (Archilocus; ca.680-ca.645BC.) による、詩の一部に由来する：(英訳) ”The fox knows many things, but the hedgehog knows one big thing.” (*The Hedgehog and the Fox: An Essay of Tolstoy's View of History*, 2nd ed. より) Princeton Univ. Press, 2013, p.1) 人間の思考方法等を見る際に、キツネとハリネズミに譬えて、キツネは、柔軟性があるが、統一性に欠ける、他方、ハリネズミは、一貫性があるが、柔軟性に欠ける、という捉え方に対照性がある。『ハリネズミと狐ー『戦争と平和』の歴史哲学』(中央公論社, 1973 年/岩波文庫, 1997 年) を参照されたい。
- ^{viii} 還元主義と訳出した reductionism について、その意味は、文脈からも推察できるが、次の定義も参照されたい：the theory that every complex phenomenon, esp. in biology or psychology, can be explained by analyzing the simplest, most basic physical mechanisms that are in operation during the phenomenon; the practice of simplifying a complex idea, issue, condition, or the like, esp. to the point of minimizing, obscuring, or distorting it. (*The Random House Unabridged Dictionary*, 2nd ed., Random House, 1987.)
- ^{ix} William E. Collinson は、Birmingham 生まれの、イギリスの英語学者・ドイツ語学者 (1889-1969)。
- ^x 文中の引用は、サピア全集第一巻所収の “Grading,” p.470 より。
- ^{xi} Deixis とは、様々な表現が可能であるが、たとえば、「発話の行われる場面との関連においてのみ、了解が成り立つような言語表現の特質をいい、たとえば, this, that, I, you here, there, now, then, come, go や現在 (present) , 未来 (future) などの時制 (tense) は、直示語 (deictic word) である」(荒木・安井編 Ibid.: 393)。また、大塚・中島 (監修)『新英語学辞典』(研究社, 1982) deixis の項も参照されたい。
- ^{xii} D. G. マンデルボーム (David G. Mandelbaum) は、アメリカの人類学者 (1911-1987)。Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality (University of California Press, 1949) の編者でもある。
- ^{xiii} descriptivist (記述主義者) は、この文脈では、個別言語の構造や機能、等の記述に際し、規範的なものを極力排して、当該言語の、あるがままの姿を捉えようとする態度 (descriptivism) をもつ者、と考えられる。cf. prescriptivist 規範主義者 (cf. prescriptivism) .
- ^{xiv} フェルディナン・ド・ソスユール (Ferdinand de Saussure; 1857-1913) は、ジュネーブ生まれのスイスの言語学者。近代言語学の父と呼ばれる。たとえば、佐々木・木原 (編著) Ibid. を参照されたい (ソスユールの項 : pp. 304-306)。
- ^{xv} プラーク学派については、たとえば、亀井・河野・千野(1996) 所収の「構造言語学」の項 (pp.524-527) や、早田輝洋・井上史雄 (共訳)『言語学の流れ』(ミルカ・イヴィッチ著, みすず書房, 1974) , 「プラーク言語学サークル」の項, pp.102-105 を参照されたい。
- ^{xvi} J. Lyons が指摘する、当該箇所の原文 (下記引用の下線部) , ならびに、その個所を説明的に展開している部分を補記する (*Selected Writings of Edward Sapir*; p.136 より) : ..., as a more or less temporary point or passage or equilibrium

between “more” than and “less than” or as a point of arrival in a scale in which the term which is to be graded is constantly increasing or diminishing. In other words, if we take q as defined to begin with, we can give meaning to a = q by saying that: (1) a is less than q to begin with, gradually increases while still less than q, and is later found to be more than q, having passed through some point at which it was neither less than nor more than q; (2) a is more than q to begin with, gradually decreases while still more than q, and is later found to be less than q, having passed through some point at which it was neither more than nor less than q; or (3) a is less than q to begin with, gradually increases while still less than q, and finally rests at some point at which it is neither less than nor more than q; or (4) a is more than q to begin with, gradually decreases while still more than q, and finally rests at some point at which it is neither more than nor less than q. These four types of equality may be classified as:

- I. Explicitly dynamic (1) While increasing toward and away from
(2) While decreasing toward and away from
- II. Implicitly dynamic (1) Having increased toward
(2) Having decreased toward

A fifth type of equality, that of kinaesthetic indifference, is the limiting or neutral type which alone is recognized in logic:

III. Non-dynamic: Statically “equal to.”

- ^{xvii} 量化という概念は、論理学と言語学それぞれの立場から、規定できるが、言語学からみると、自然言語において、固有名詞以外の名詞句が指示する対象の数または量を指定することを言う。それらの数または量を表すものを数量詞 (quantifier) という (cf. 荒木・安井編 *ibid.*)。
- ^{xviii} *telicity* は、限界性、もしくは、有界性ともいわれ、*telic/atelic* という意味の性質に関係し、相 (aspect) という概念に深く関わる。本稿の注 ^{xxi} ならびに、Bernard Comrie, *Aspect* (Cambridge University Press, 1978) pp.44-48 を参照されたい。
- ^{xix} “Totality” (1930)を参照。
- ^{xx} この指摘に関連して、次の文献も参照されたい：Laurence R. Horn, “Edward Sapir as Pragmaticist” 『日本エドワード・サピア協会 研究年報』 30号 (2016) ,pp. 11-26. 特に、数量表現と段階的 (程度) 形容詞に言及した3節は、本稿との関連が深い。
- ^{xxii} アスペクト (相) は、一般的には、テンス (時制) とともに、時間に関係する概念として知られているが、文法形式上の概念としても用いられることがある。詳しくは、たとえば、荒木・安井編 *ibid.* *aspect* (相) の項を参照されたい。
- ^{xxiii} サビアの意味論三部作に関して、主にその現代的な意義を扱ったものとして、たとえば、加藤泰彦による一連の論考がある(1990, 1992, 2011, 2015) :
・「サビアの Grading とその拡張について」『日本エドワード・サピア協会ニュース・レター』第4号 (1990) pp.17-26.
・「サビアの Totality と否定について」『日本エドワード・サピア協会ニュース・レター』第6号 (1992) pp. 38-47.
・「サビアの Ending-Point Relation について」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第25号 (2011) pp.39-45.
・「サビア意味論三部作」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第29号 (2015) pp.13-29.

*

本稿は、訳出、注記にあたり、複数の辞書や参考文献を参照させて頂いた (参考文献は、訳注内に明記)。ここに、感謝の意を表す。訳注は、翻訳という本稿の性質上、なるべく簡素な形にとどめた。言語学上の専門用語や、当該テーマに係る、最近の研究動向などについて、既存の訳注をさらに補足し、注を追加する余地があるであろうが、追って加筆の機会があれば、検討を加えたい。依然として残るであろう翻訳の欠陥は、すべて訳者の責任である。読者の方々の御教示をお願いしたい。